

**所在 地** 宮城県遠田郡涌谷町涌谷字日向町、福沢、八幡山ほか

**立地環境** 大崎平野東端、江合川左岸の標高 9 ~ 45 m の丘陵上

**発見遺構** 掘立柱建物、掘立柱列、材木塀、土壙、土坑、溝など

**年 代** 8 世紀 ~ 9 世紀

## 遺跡の概要

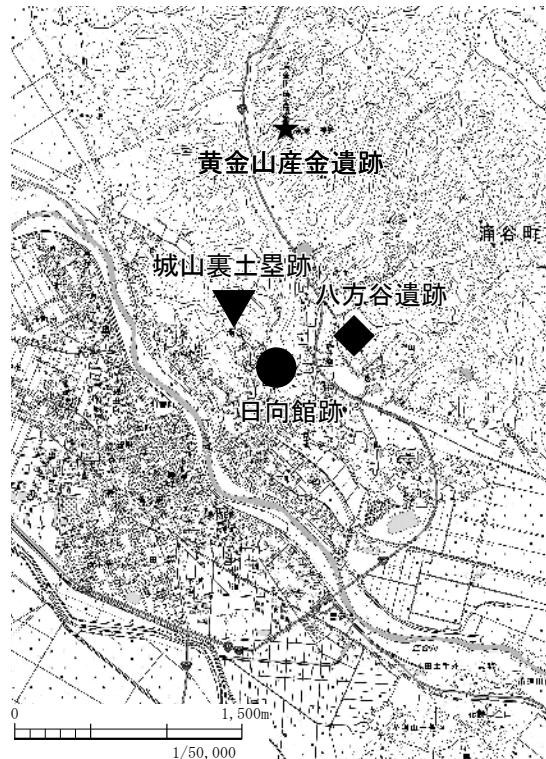
日向館跡は、JR 涌谷駅から北東へ約 1.1km に位置する（第 1 図）。遺跡は、涌谷町の中央で北西から南東へ連なる笠岳丘陵の南端部、標高約 9 ~ 45 m の丘陵尾根筋に立地し、県指定神明社の境内を頂部とする。西方には、大崎平野を西から東へ流れる江合川が貫流している。

涌谷町域は古代陸奥国小田郡に含まれる。『涌谷町史上巻』は、神明社一帯の地域に小田郡に関連する公的な施設があったと推測した。近年、神明社境内やその周辺で古代の瓦が採集されていたことから、改めて古代の官衙関連施設が周辺にあるのではないかと注目されている。日向館跡から約 0.5km 北の丘陵上には、東西方向に延びる 2 条 1 組の「土壙状の高まり」が確認される城山裏土壙跡、それと一連の高まりとみられる八方谷遺跡があり、空撮写真や赤色立体地図などから、これらの遺構は一部途切れながらも東西約 1.2km にわたり続くことが考えられた。また、約 1.6km 北には、天平産金に深く関連する奈良時代の仏堂跡が確認された国史跡黄金山産金遺跡がある（第 1 図）。さらに、本遺跡周辺の黄金迫遺跡、日向町遺跡、福沢遺跡では、古代の瓦などが採集されている。

### 1. 調査の概要

城山裏土壙跡に関する調査は、平成 19 ~ 22 年に実施している。平成 19 年は、城山裏土壙跡や八方谷遺跡で確認されていた「土壙状の高まり」の踏査を実施した。城山裏土壙跡では 5 m 前後の間隔で平行して延びる 2 条 1 組の「土壙状の高まり」が東西約 450 m にわたって分布し、八方谷遺跡でも同様の高まりが約 150 m の長さで分布することを把握した。そして平成 20 年には、この 2 つの遺跡周辺をボーリング調査し、高まりの間の溝状の凹みには十和田 a 火山灰が堆積していることを確認した。この結果を受けて、平成 21・22 年に城山裏土壙跡に分布する「土壙状の高まり」の確認調査を実施し、その高まりや凹みが奈良・平安時代頃の土壙・堀であることを確認した（第 2 図）。

日向館跡に関する調査は平成 26 年度に実施している。遺跡の南西端で集合住宅新築工事が予定されたことから、遺跡の遺存状況を確認するため確認調査を実施した。その結果、奈良・8 ~ 9 世紀代とみられる掘立柱建物や掘立柱列のほか、材木塀、溝などを確認した（第 4 図）。また、平成 21 年には東北歴史博物館などが分布調査を行い、古代の瓦を採集している（第 3 図）。



第 1 図 日向館跡・城山裏土壙跡の位置

## 2. 調査成果

日向館跡の調査では、掘立柱建物、掘立柱列、材木塀、溝などを検出した（第4図）。堆積土の状況や出土遺物から、主な遺構の年代は、十和田a火山灰降灰以前の8～9世紀と考えられ、遺構の新旧関係から少なくとも3時期以上の変遷が認められた。また、これらの遺構は丘陵南端の緩斜面に密集して確認されたことから、同様の地形が広がる調査区の東西や南方にもさらに広がると考えられる。

特に、調査区の南部・北部で検出した2棟の掘立柱建物は、SB1が5間以上×2間以上、SB4は5間×3間となる大型の南北棟であり、方向が真北から東へ少し傾き、西側柱列の筋がほぼ揃う。また、柱穴の長辺が1m以上で柱間寸法が2.4mと共通する。SB1は、同位置で建て替えられており、この場所は計画的な建物配置が一定期間存続した様子が窺える。

城山裏土墨跡の調査では、土墨や堀などを検出した。堆積土の状況や出土遺物から、遺構の年代は十和田a火山灰降灰以前の8～9世紀とみられる。土墨や堀は、各々2時期の変遷が認められた。a期の土墨は、基本的に削出しの基盤の上に積土・盛土を行っている。b期の土墨はa期の土墨を削り、堀を埋戻して基礎をつくりその上に土墨を構築したが、南側での本体を版築状に丁寧に積み上げ、ほぼ垂直に立ち上がるのに対し、北側は整地・本体とも南側ほど丁寧ではない傾向が窺えた（第5・6図）。

以上のことから、トレーナー5～6の間（約450m）で部分的に確認できる2条1組の「土墨状の高まり」やその間の「溝状の凹み」は、東西に延びる丘陵尾根筋から北斜面にかけて造られた一連の土墨・堀で、全体を通して造り直しが行われたと考えられる。また、これらの区画施設はトレーナー6より東では部分的・痕跡的にしか確認できないものの、さらに東へ延び八方谷遺跡の土墨につながって一連の施設を構成し、広い範囲を囲んだ可能性が考えられる。

## 3. まとめ

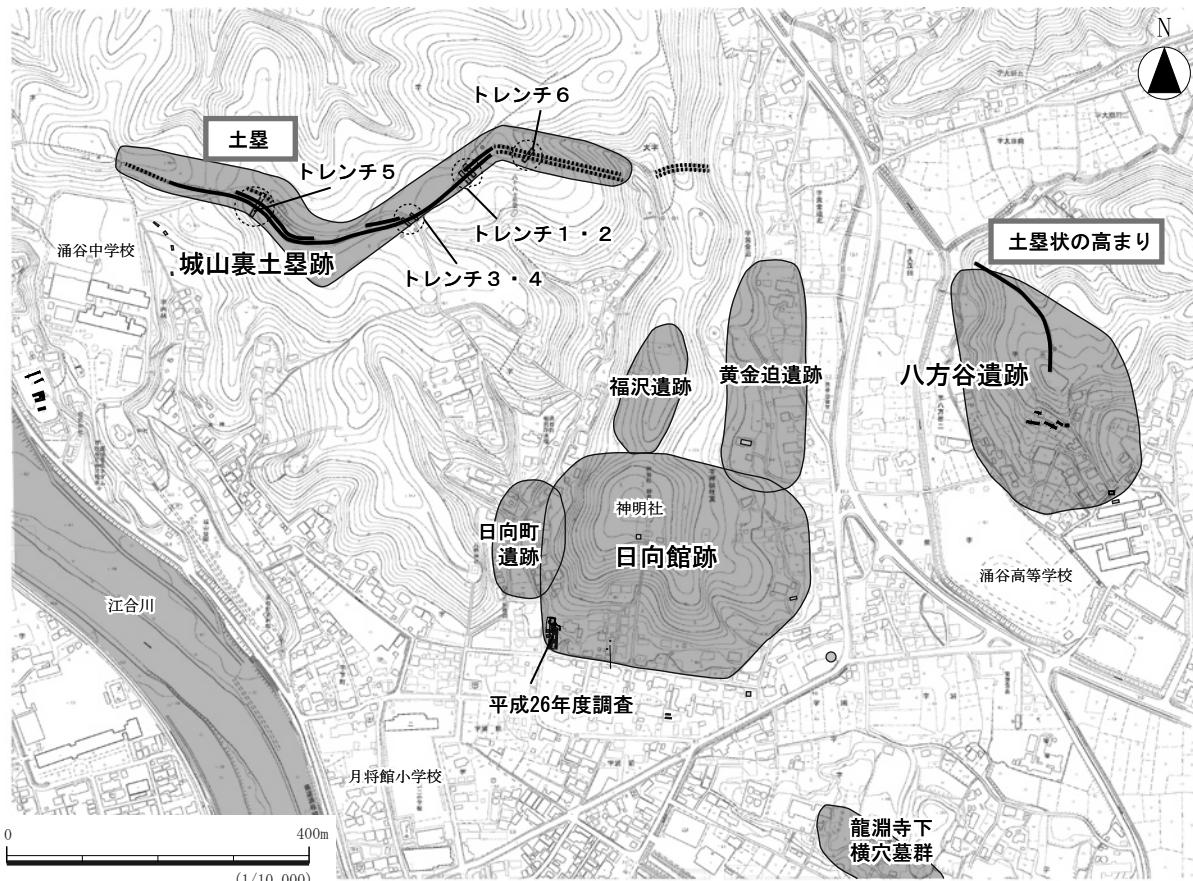
日向館跡で確認した大型建物群は計画的に配置され、一定期間存続したことがわかった。城山裏土墨跡の調査で確認した土墨や堀もまた古代の遺構であり、両者は同時期に機能した可能性がある。こうしたあり方は、城柵官衙遺跡と共通しており、日向館の大型建物群は実務官衙域、あるいはそれより格式の高い建物群を構成したとみられる。

東山官衙遺跡や城生柵跡など、黒川以北十郡域の城柵・官衙遺跡は、8世紀後半になると、政庁—内郭：実務官衙域—外郭：住居域の三重構造となることが指摘されている（文献3）。それに基づくと、城山裏土墨跡から八方谷遺跡へ続く約1.2kmの土墨・堀は外郭施設、そのほぼ中央に位置する日向館跡周辺であり、その中でも古代瓦が出土した神明社一帯に政庁が置かれた可能性が考えられよう（文献2）。こうしたことから、外郭北辺から日向館跡の調査地点までの、少なくとも東西約1.2km、南北約0.6kmの範囲は城柵官衙の内部であり、それに係わる施設が展開した可能性が考えられる。

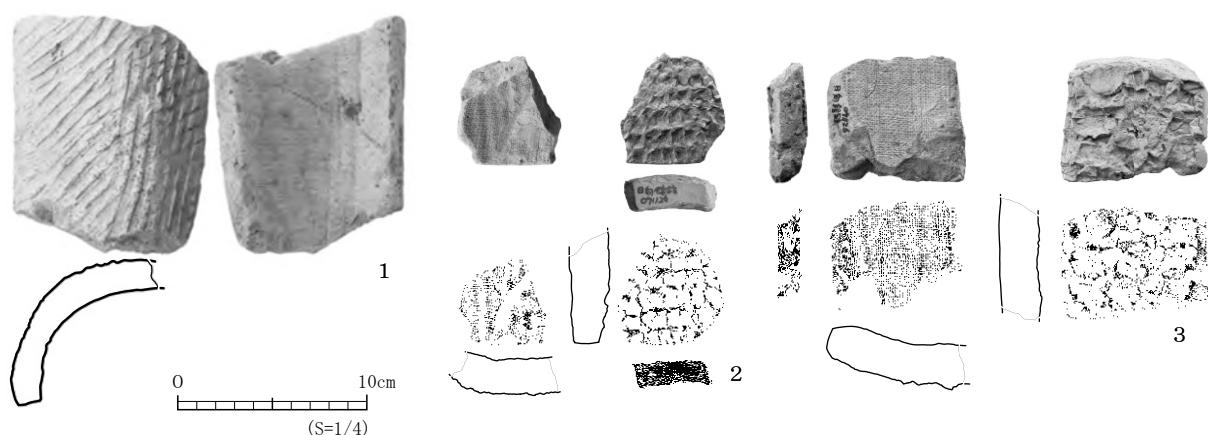
奈良時代中頃の小田郡は律令国家の東辺にありながら、天平産金をはじめ、軍団が置かれるなど、陸奥国の中で重要な役割を果した。日向館跡から採集された丸瓦は多賀城創建期の初期段階に位置づけられ、平瓦は仙台市郡山Ⅱ期官衙期に相当するという指摘がある（第3図、文献2）。日向館跡と城山裏土墨跡は、一体となって城柵の機能を有した小田郡家と考えられたが、発掘は北辺の外郭区画施設と内部官衙施設の点的な調査にとどまる。外郭区画施設（西・東・南辺）と内郭区画施設の位置と構造、内部における官衙施設の内容や年代の把握については、これから課題である。小田郡における城柵・官衙遺跡の実態解明に向け、引き続き調査や研究に取り組んでいきたい。

## 関連文献

- 1 相原淳一・谷口宏充・千葉達朗 2019「赤色立体地図・空撮写真からみた城柵官衙遺跡—宮城県石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺—」『東北歴博物館研究紀要』20
- 2 相原淳一・二瓶雅司 2022「宮城県涌谷町日向館跡・中野遺跡の調査」『東北歴史博物館研究紀要』23
- 3 村田晃一 2015「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』東北の古代史3 吉川弘文館
- 4 涌谷町史編纂委員会 1965『涌谷町史 上』
- 5 涌谷町教育委員会 2010「城山裏土塁跡」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 6 涌谷町教育委員会 2011「城山裏土塁跡」『第37回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 7 涌谷町教育委員会 2015「日向館跡」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 8 涌谷町教育委員会 2016「日向館跡・城山裏土塁跡」『第42回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

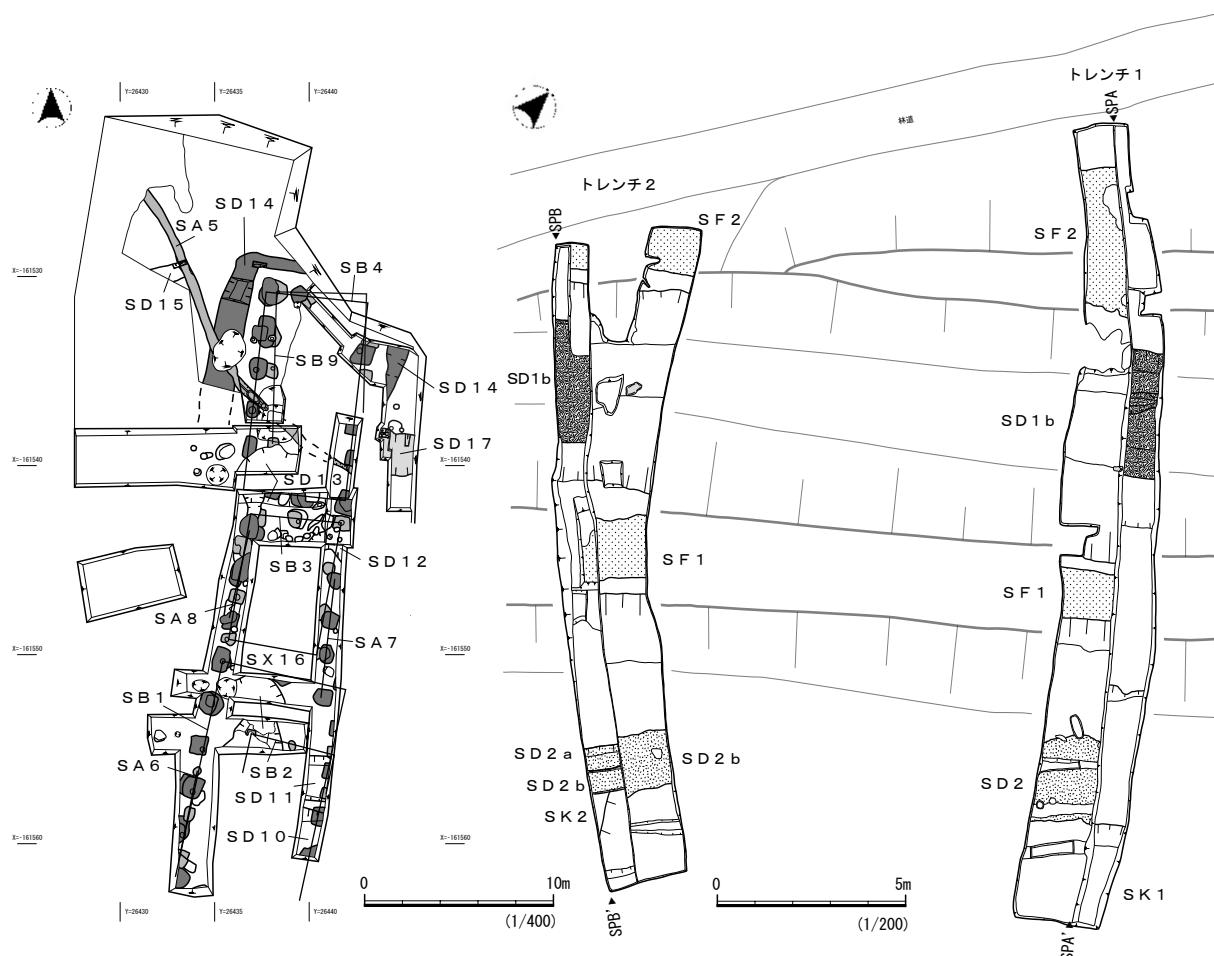


第2図 日向館跡・城山裏土塁跡・八方谷遺跡など古代の主な遺跡と調査地位置図（文献8に加筆）

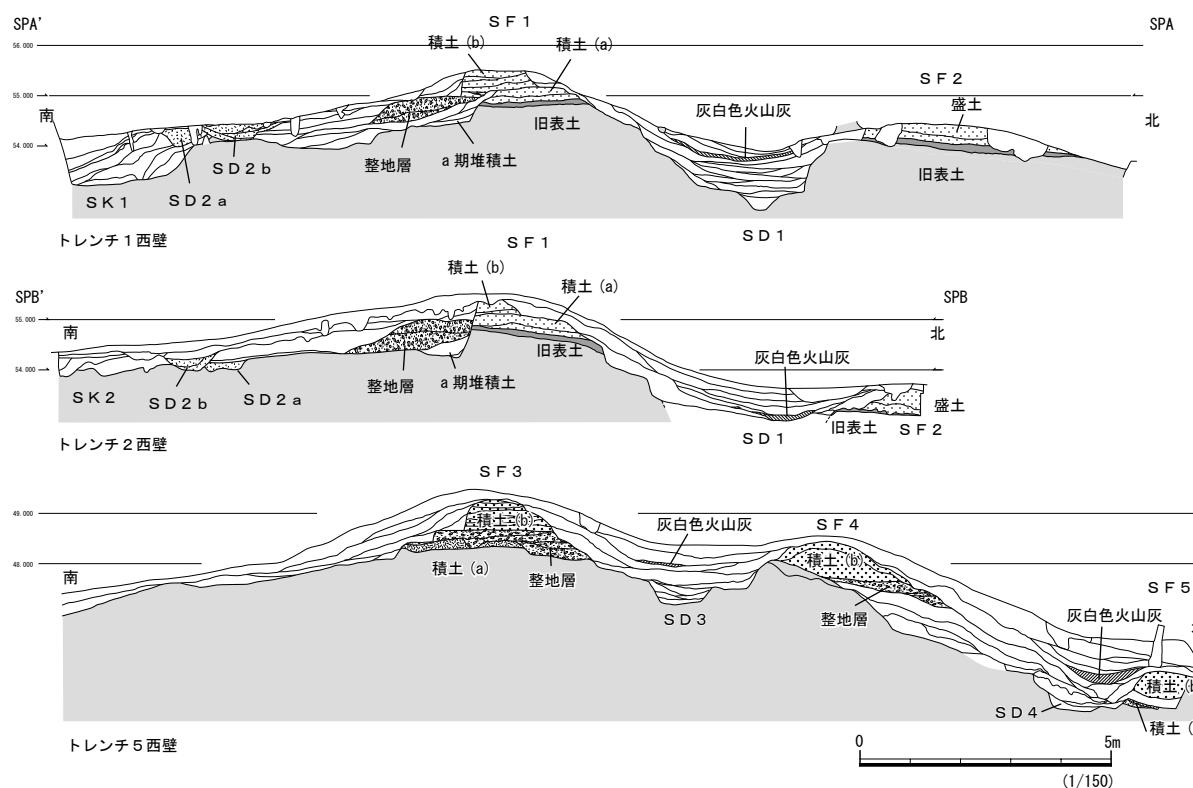


1：丸瓦【凸面：平行叩き目、凹面：布目痕】 2・3：平瓦【凸面：格子叩き目、凹面：竹管状模骨痕・布目痕】

第3図 日向館跡で採集された瓦（文献1・2から作成）



第 5 図 城山裏土墨跡 トレンチ 1・2 全体図  
(文献 8)



第 6 図 城山裏土墨跡 トレンチ 1・2・5 断面図 (文献 8)